第37回 全日本大学男子選手権大会

平成14年8月10日(土)～12日(月)　京都府宇治市・城陽市・久御山町／山城総合運動公園他

日本体育大（東京）3連覇を達成！

日ソ協記録委員　小山　光弘

標記大会は、茶所として名高く、世界遺産の平等院鳳凰堂の在所としても知られる京都府宇治市を主会場に開催された。この宇治市は「源氏物語」ゆかりの里としても有名で、かつて京都国体の会場となった宇治市、城陽市、久御山町の2市1町を舞台に、「大学日本一」の座をめざす熾烈な戦いが展開された。

力と力のぶつかり合い、投・攻・守・走すべてがスピード感溢れ、スリリングな試合展開を期待し、酷暑の中にもかかわらず大勢の観客が詰めかけ、その一投一打を見守った。

折しも、大会初日の夜が宇治市恒例の花火大会と重なり、7000発の花火が夜空を彩り、あたかも選手を歓迎しているかのようであった。

大会は、日本体育大の3連覇なるか。戦力充実の国士舘大（東京）がこれを阻止するか。地元期待の立命館大（京都）が3年ぶりの王座奪回を果たすかなどに注目が集まったが、結果は日本体育大が見事3連覇を達成。通算25回目の優勝を飾った。

1回戦で広島経済大（広島）、中京大（愛知）が、それぞれ逆転サヨナラ本塁打で劇的な勝利を収めれば、2回戦では国士舘大が京都大（京都）を相手に、1イニング6本塁打をはじめ1試合32安打、34得点、34打点、二塁打6、本塁打11、チーム打率7割6分2厘という驚異的な新記録を樹立。従来の記録を大幅に塗り替えた。

準々決勝では、3連覇を狙う日本体育大が神戸学院大（兵庫）を相手に、エース・高橋が1点を失いはしたが3－1で下し、順当に勝ち上がった。

早稲田大（東京）は大阪経済法科大（大阪）を5－0で一蹴。エース・石橋の2安打完封の力投で勝利を収めた。

立命館大は、福岡大（福岡）に苦戦を強いられたが、後半に入って劣勢を跳ね返す2本塁打を含む7安打を集中。8－4で逆転勝利を収めた。

国士舘大は2回戦に続いて打線が爆発。城西大（埼玉）を11－0のコールドで下し、ベスト4進出の4チームが出揃った。

個人記録に目を向けると、打撃では日本体育大・坂井と国士舘大・本郷の2人が15打数12安打で打率8割。驚異的豪打で他の追随を許さなかった。

投手では、日本体育大・高橋が1年生らしからぬ堂々たるピッチングで3勝を挙げ、防御率0・70の安定した投球内容で3連覇達成に大きく貢献した。立命館大・尾上も投げては3勝を挙げ、防御率1・50と好投。打撃でも打率5割・3本塁打と打ちまくり、準優勝の立役者となった。

○準決勝

日本体育大	3	6	0	0	1	6		16
早稲田大	2	0	0	0	0	1		3

※大会規定により6回コールド

（日）○山尾・佐藤―小野
（早）●石橋・中島―鈴木

▽本坂井③、勝呂（日）新井（早）
三小野（日）根ヶ山、鈴木（早）
（審）P高田　1谷　2株田　3島
（記）櫻井

日体は初回、四球、安打、四球で無死満塁のチャンスをつかみ、4番・小野の左犠飛でまず1点。なお一死二・三塁から5番・勝呂が右前にタイムリーを放ち、2点を追加。この回計3点を挙げると、続く2回には3番・坂井、5番・勝呂の本塁打などで大量6点を加え、序盤で試合を決めた。この試合、3番・坂井は5回、6回にも本塁打を放ち、1試合3本塁打。チームの全得点の半分にあたる8打点を叩き出し、決勝に弾みをつけた。

早稲田は初回に3点を失いながら、その裏すぐに2点を返し、追い上げを図ったが、2回以降は5番・新井の本塁打による1点だけに抑えられ、コールド負けを喫した。

○準決勝

立命館大	0	0	2	2	0	0	0	4
国士舘大	0	0	0	0	1	0	0	1

（立）○尾上―緒方
（国）●照井・小田澤―萩原

▽本萩原（国）
（審）P中村　1中井　2柴田　3山崎
（記）岡田

立命館は3回、9番・小原、1番・片岡、2番・春日の3連打で一死満塁とし、3番・尾崎への3球目が捕逸となり、労せずして1点を先取。さらに尾崎の左犠飛でこの回2点を先制した。4回には、二死二・三塁から1番・片岡が二塁強襲のタイムリー。二者が還り、4点のリードを奪った。

一方、国士舘は初回、1番・鈴木が内野安打で出塁し、すかさず二盗、三盗。先制機を作ったが後続なく、5回に7番・萩原の本塁打で1点を返すのが精一杯。立命館・尾上を最後まで崩せず、準決勝で姿を消した。

立命館は、国士舘・照井を攻略し、決勝進出を決めた

◎決　勝

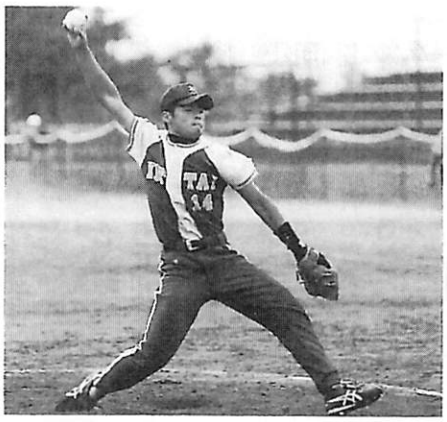
立命館大	0	0	0	0	0	0	0	0
日本体育大	0	0	0	0	2	0	X	2

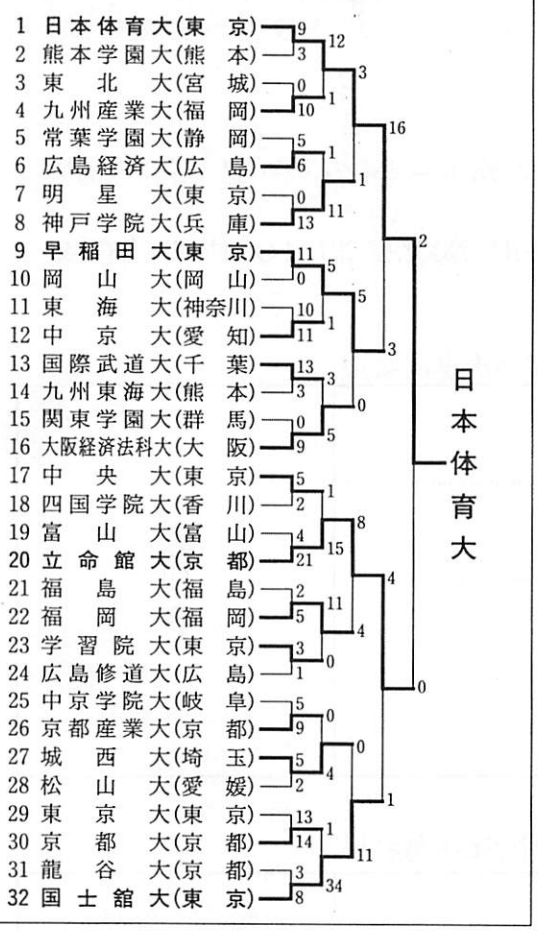
（立）●尾上―緒方
（日）○高橋―小野
（審）P内海　1村上　2谷　3中井
（記）尾松

試合は4回まで両チーム無得点。立命館・尾上、日体・高橋両投手の投げ合いで緊迫した投手戦を展開。試合は5回に動いた。

日体は一死から8番・宮川、9番・杉山の連打で一・二塁。1番・津本が四球を選んで満塁とし、2番・岡の一塁強襲安打で二者生還。結局これが決勝点となった。

守っては、1年生エース・高橋が被安打4・奪三振10の力投で三塁すら踏ませず完封勝ち。3連覇を達成した。



優勝投手となった日体大・高橋流星

第37回 全日本大学男子選手権大会